石塚　康也

ISHIDUKA　KOUYA

1954年 柏崎市高柳町出身

大小さまざまな太鼓やシンバルから成る楽器、それがドラム。右手右足と左手左足がそれぞれのリズムを刻み、複合的な音とリズムを奏でる。ロックやポップスなどバンド音楽のシーンでは楽曲全体をリズムでリードする。メロディーを奏でる楽器とは違い、コードや音程に縛られないためアレンジも自在にできる。しかしその分、難しい楽器という印象がある。

その難しいドラムを50代になってから挑戦し始めたという石塚康也さん。ジャズドラムを始めて10年ほどになる。

元々音楽が好きで、学生時代はクラシックギターを弾いていた。小学校教諭の時代はピアノの代わりにギターを弾いて音楽の授業を行ったり、ギターに合わせて子供たちが合唱したりしていたという。

新校長として赴任した地で初めて単身赴任の生活を経験、帰宅しても本を読むかテレビを見るしかやることがなかった。長い夜の時間をサイレント機能のある楽器なら音楽が楽しめると思い、せっかくなら新しい楽器にも挑戦してみたい。シンプルで格好いい楽器、それがドラムだった。

アパートに戻り、組み立てたサイレントドラムで最初に取り組んだのはロックの８ビート。親しみやすく、ポップスならこのリズムでだいたい合う。その次に挑戦したのがジャズの４ビート。右手のシンバルをレガートに叩くことが基本で「これが難しかった」と話す。

2年後の転勤で柏崎に戻ると市内の音楽教室に通い、ドラムを習い始めた。いざ学び始めてみると目から鱗が落ちるようなことばかり。ドラムもチューニングをしなければいけないということに驚かされた。また、ドラムを叩くのはスティックの他に、ブラシやマレットも使うというのも新鮮だった。

ジャズはテンポの速い曲も多く、第３の手ともいわれる複雑な右足の使い方も難しい。「そんなわけで私の『ドラム行』は頓挫してばかり。それでも教室に行って、講師の先生に励まされるとやる気になる」とほほ笑む。

ジャズドラムを習い始めるようになって音楽の世界が広がったと話す石塚さん。講師のジャズドラマー内山二夫さんが所属するバンドを招き、当時勤務していた市内の小学校や寺院で音楽イベントを開催。子供たちや保護者、地域の人たちと共にジャズの生演奏を楽しんだ。また、内山さんの演奏を聞きに新潟市内のジャズ喫茶やイベントへ出掛けるなど、ライブの楽しさや音楽の奥深さに刺激を受けている。

石塚さんは、いつかライブに出演してみたいという目標を持ち、ジャズドラマーとしてほとんどのスタンダード曲が叩ける日を目指して、日々楽しみながら練習に励んでいる。